

金持ちの二代目

黄 顕

(訳 横田勤・萩田麗子)

寮の 316 号室に住んでいる張鵬と劉劍濤は親友である。二人は同じ省の出身で、更にうまい具合に年齢が同じであるばかりでなく、なんと誕生日が同じ日であった。それで大学に通い始めた初日から、同年同月同日生まれの二人は友達になったのである。しかし、二人にも少なからず相違点はある。たとえば家庭環境。張鵬は金持ちの二代目であり、父親は名の知れた大企業の子会社の社長で、収入は十分あり、張鵬は今まで金の事で心配したことがない。金を使う時はパツパツと使い、同窓会や外で食事をする時などは、すべて彼が先を争って勘定を支払った。劉劍濤は彼よりはずっと生活が苦しく、節約して質素に暮らしている。入学してすぐ、授業のあいまを利用してアルバイトを始め、生活費を稼いでいた。大学四年間、家庭教師をし、レストランでウェイターをし、寮の建物掃除をし、さらに、あるコンピューター会社でソフトウェア制作をしていた……とにかく、大学の四年間、彼が実家にお金を送ってくれと言ったのを、張鵬は見たことがなかった。貧乏人の子供というものは早くから独立して生計を立てるものなのだ。

親友が大学で勉強するのにこのように難儀しているのを見て、太っ腹の張鵬としては彼を助きたい気持ちがある。しかし毎回、負けん気が強い劉劍濤に断られた。一度、張鵬はこっそりと劉劍濤の財布の中に五百元のお金を入れた。だが次の日、劉劍濤はお金を彼に返して、自分の稼いだお金で十分足りる、と言った。

四年間はあっという間に過ぎて、あっという間に大学四年の後期となった。卒業が近づき、同級生達はみな仕事探して忙しく駆けずり回り、その他の事をする暇がない。張鵬は職探しの心配がない。卒業後は父親の会社にすぐ就職できるから、のんびりしたものである。彼は、自分と劉劍濤の誕生日が近づいた時、大々的に誕生パーティーをやり、二人の大学時代の最後の誕生日を記念することに決めた。当然、費用はすべて自分もちだ。

劉劍濤はあいかわらず家庭教師やアルバイトで忙しく、誕生日の前日になって、張鵬はやっと彼に、自分はすでにホテルを一部屋借り切っている、明日の夜は楽しく騒ごう、と言った。だが彼は劉劍濤が、「自分は誕生日を祝うつもりはない、明日の夜は家庭教師をしに行かなければならない。だから参加はしない」と言うなんて、思いもしなかった。

張鵬の心に満ちていた熱い気持ちは冷水を注がれて消えてしまい、思わず顔いろが変わった。心の中で「劉劍濤、お前は人の気持ちがわからないのか。配慮が足りないぞ。金を稼ぐのがそんなに大事なのか。同級生の四年生はみんな、あちらこちらに駆け回らなきゃならない、これからは集まりたくても集まれる機会が無くなってしまふんだぞ」と、言った。彼は蔑むように言った。「お前は金を稼げなくなることを心配しているんじゃないのか？　じゃあ聞くが、一日どれだけ稼げるんだい？　明日の賃金はぼくがやるよ、だったらいいだろう？」

劉劍濤は、彼が好意からやっていることが分かっていたので、彼の態度が変わったのを見て、「わかった、明日は行くよ」とこたえるしかなかった。「でも、費用は割り勘だよ。大体どのくらい要るのかな？」

張鵬は手を振って、「要らないよ、大したことはないんだ。ぜんぶぼくに任せてくれ」　彼は心の中で「数字を言えばきっとお前を驚かせてしまうさ」と言った。

劉劍濤は争っても彼にはかなわないのを知っていたので、もう固執しなかった。

翌日の夜、全クラスと同級生が一堂に楽しく集い、心行くまで楽しんだ。パーティーが終わり、かなり酔っ払った張鵬がカウンターへ行って会計を済ませようとすると、なんと劉劍濤がすでに支払いを済ませていた。費用は五千元だった。

次の日、張鵬は銀行へ行って五千元のお金を引き出した。必ずお金を劉劍濤に返さないといけない。

「五千元は小さな額ではない、お前は一年近く家庭教師をしなくてはならないぞ」と彼は劉劍濤に言った。劉劍濤はちょっと笑って、言った。「そう、一年間は家庭教師をしないとといけない額だよ。でも僕が家庭教師をするのは、決してお金のためじゃないんだ。いまお金には困っていない」

張鵬は不思議に思って尋ねた。「それじゃお前が苦勞してせつせと家庭教師をするのは何のためなんだ？」

劉劍濤は言った。「今、一人の外国人に中国語を教えているんだけど、実は彼

から英話を学ぶためなんだ」

張鵬は理解したが、やはり金を劉劍濤の手の中に押し込んで言った。「断らないでくれ、知ってるんだ、お前が……とても苦しいのを。そうでなきゃ今もずっとパソコン会社でアルバイトをするはずがないだろう。僕らは三、四カ月すると卒業だ。同級生たちはみな仕事探しに駆け回っているが、お前はこの期間、アルバイトに行くなよ。この三千円はアルバイト代にしよう。

「それじゃなおさら、僕には必要がない。何もせずに賃金は受け取れないよ」劉劍濤は笑いながらお金を押し戻して言った。「張鵬、ありがとう。でもぼくは、パソコン会社でアルバイトをしているんじゃないんだ。いまはそのパソコン会社の株を持っていて、経営者の一人なんだよ」

張鵬は聞くや否や、いぶかって目を大きく開いた。「お前がパソコン会社の社長だって？」

「そうだよ。ここ数年間、ぼくは会社のためにソフトウェアをいくつか作った。その技術で株を買って少しずつ蓄えて、いまは大株主の一人になったんだ」

張鵬は興味を持って尋ねた。「それじゃ、お前の株はどのぐらいの値段なんだい？」

劉劍濤は軽く答えた。「大したことはない、一千萬元ちょっとかな」

張鵬はそれを聞くや、びっくり仰天した。大学四年間で、劉劍濤が裸一貫から起業し一千萬元の金持に成るなどとは、思ってもみななかった。劉劍濤に卒業後の仕事のことを心配させず、その時がきたら自分が彼を父親の会社に紹介してやればいいと思っていた。いまはもう何もその必要がなくなった。彼は自分の父親よりも金持ちなのだ。

六月がきて、張鵬と劉劍濤は大学を卒業することになった。折よく張鵬の父親は大学のあるこの市へ来て、本社の会議に参加し、ついでに大学へ寄り、息子の卒業式を見学することにした。

式典が終わり、張鵬が父親を連れて劉劍濤のそばにやって来て、誇らしげに言った。「父さん、紹介するよ。ぼくがいつも話していた劉劍濤。裸一貫から起業したんだ。いま資産は一千萬元以上なんだ」

張鵬の父親の視線は、劉劍濤のとなりにいた人物にそそがれた。続いて満面に微笑みを浮かべ、いぶかしげに尋ねた。「劉社長、どうしていらしたのですか？」

その人物はうなずいて笑って言った。「息子が大学を卒業するんだから、当然来なくちゃいけないだろう」彼は手を伸ばして劉劍涛をちょっと指さして、紹介した。「これが愚息だ」

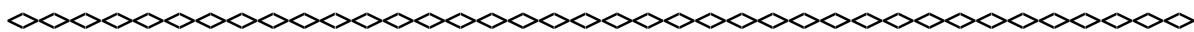
「何ですって、劉劍涛があなたの息子さん？ 本当に、優れた父親には出来の悪い子はいないんですね！」

張鵬は状況を見て、そっと父親の襟をひっぱり、小さな声で尋ねた。「父さん、この人は誰？」

父親は低い声で言った。「本社の社長で、会社の代表取締役だよ」

張鵬はびっくり仰天した。なんと、劉劍涛の家庭環境が自分よりはるかに勝っていたとは、思ってもみなかった。自分は金持ちの二代目なんかじゃない、彼こそ正真正銘の金持ちの二代目だ！」

張鵬は突然、穴があったら入りたいと思いつた。この大学四年間を無駄に過ごしたことを思い出すと、顔がすぐに赤くなった。



(中国語原文)

富二代

黄 胜

这是一杆老枪。老，但并不等于已经报废，相反，它的命中率极高，百发百中。

316 宿舍的张鹏和刘剑涛是一对好朋友，两人来自同一个省份，更巧的是，两人不但岁数相同，居然还是同一天的生日。于是，从上大学的第一天起，同年同月同日生的两人就成了朋友。不过，两人也有不少差异的地方，比如说家庭背景：张鹏是富二代，他父亲是一家知名大企业的分公司经理，收入丰厚，张鹏从来不为钱的事情发愁，花起钱来大手大脚，逢到同学聚会、外出就餐之类，都是他抢着买单付账。而刘剑涛跟他相比就窘迫多了，他生活俭朴，而且从一入学开始，课余时间就去打工赚生活费，大学四年，他做过家教，在餐馆端过盘子，打扫过宿舍楼的卫生，还为一家电脑公司设计过软件……总之，大学四年，张鹏没见过他伸手跟家里要一分钱，穷人的孩子早当家啊。

见好朋友读大学这么难，为人豪爽的帐篷张鹏就有心帮他，但每次都被

好强的刘剑涛谢绝。有一次，张鹏偷偷往刘剑涛的钱包里放了五百块钱，但第二天，刘剑涛就把钱还给了他，说自己赚的钱已经够用了。

四年时光飞逝而过，转眼到了大四这年的下学期。临近毕业，同学们都在为找工作的事情奔忙，无暇其它事情。张鹏没有求职之虞，毕业后去父亲的公司就职即可，所以悠闲自在。在他和刘剑涛共同的生日来临之际，他决定大办一个生日派对，来纪念两人大学时代的最后一个生日。当然，所有费用都由他自己负责。

刘剑涛依然忙着做家教、打工，直到生日的前一天，张鹏才告诉刘剑涛，说自己已经在酒店订好了包间，明晚要好好热闹一下。没想到，刘剑涛却说我不打算过生日，明天晚上我还要去做家教，就不去参加了。

张鹏一腔热情被冷水浇灭，脸上不由变色，心说刘剑涛你太不够意思了，难道赚钱就那么重要？大家同学四年，马上就要各奔东西，以后想聚都没有机会了呀。他鄙夷地说：“你不就是怕耽误挣钱吗？我问你，你一天可以赚多少钱？明天的工资我付给你还不行吗？”

刘剑涛知道他也是一番好意，见他翻脸，就只好答应下来，说：“好吧，明天我去。不过，费用我和你分摊，大概需要多少钱？”

张鹏摆摆手，“不用了，小意思，一切由我负责。”他心说，说出那个数字非把你吓趴下不可。

刘剑涛知道争不过他，也不再坚持。

第二天晚上，全班同学欢聚一堂，玩得非常尽兴。等派对结束，喝得醉醺醺的张鹏前往柜台结账时，却得知刘剑涛已经买了单，花费五千块。

第二天，张鹏去银行取了五千块钱，一定要把钱还给刘剑涛。他说五千块不是小数目，你要做近一年家教呢。刘剑涛一笑，说：“是得做一年家教，不过我做家教并不是为了钱，我现在不缺钱。”

张鹏奇怪地问：“那你辛辛苦苦做家教是为什么？”

刘剑涛说：“我现在是在辅导一个外国人学习汉语，其实，我也是为了跟他学英语口语。”

张鹏明白了，还是把钱硬塞到刘剑涛手里，说：“你别推辞了，我知道你还是……比较困难，不然你现在也不会继续去电脑公司打工呀。咱们还有三四个月就要毕业了，同学们都在跑工作，我看你这段时间就不要去打工了，这三千块钱就算是你打工的工钱吧。”

“那我更不能要了，无功不受禄啊。”刘剑涛笑着把钱推回来，说，“谢谢你张鹏，不过，我可不是给电脑公司打工，因为现在我在那家电脑公司有股份，是老板之一。”

张鹏一听，惊讶地瞪大眼睛：“你是电脑公司的老板？”

“是啊，这几年我为公司设计了几个软件，以技术入股，积攒下来，现在我已是大公司的大股东之一。”

张鹏好奇地问：“那你的股份能值多少钱？”

刘剑涛轻松地说：“不多，上千万吧。”

张鹏一听，差点惊掉了下巴。没想到大学四年，刘剑涛白手起家，竟成了千万富翁。他本来还想让刘剑涛不用操心毕业后的工作，到时候自己把他介绍到父亲的公司就行，现在看来，根本没必要了，人家现在比自己的父亲还有钱呢。

到了六月，张鹏和刘剑涛就要大学毕业了。刚好张鹏的父亲来本市参加总公司的一个会议，就顺便来学校观摩儿子的毕业典礼。

等典礼结束，张鹏领着父亲来到刘剑涛身边，自豪地说：“爸，我给你介绍一个人，这就是我常跟你说起的刘剑涛，他白手起家，现在资产都上千万了。”

张父的目光却落在站在刘剑涛身侧的一个人的身上，继而满脸堆欢，惊讶地问：“刘总，您怎么也来了？”

那人点头笑道：“我儿子大学毕业，我当然也要来啊。”他伸手指了指刘剑涛，介绍说：“这就是犬子。”

“什么，刘剑涛是您的公子？真是虎父无犬子啊！”

张鹏见状，轻轻扯了扯父亲的衣襟，低声问：“爸，这人是谁啊？”

张父低声说：“他就是我们的大老板，公司董事长。”

张鹏大吃一惊，没想到，刘剑涛的家庭背景竟然远胜自己！自己算什么富二代，人家才是真正的富二代啊！

张鹏突然觉得无地自容，回想自己大学这四年虚度的光阴，脸顿时红了。

□□□□□